

## [発表 1]

# ネットユーザーの情報行動に関する研究 —情報検索とメディア・リテラシーに関する検討—

上智大学大学院 文学研究科  
新聞学専攻 博士後期課程 戸田里和

## 1. 研究目的

私たちの身近では今、ADSL や光ファイバーによるブロードバンド化、携帯電話によるモバイル化など、世界最先端とも言えるブロードバンド環境の整備が着実に進んでいる。インターネットは、必要な情報を入手することと仲間との情報交換が 5 割を超えるなど情報収集（検索）とコミュニケーションのツールとなり、我々がアクセスできる情報源と情報量は飛躍的に増大した。しかし、インターネットは洪水のように溢れる情報を容易に取得できるがゆえに、意味の咀嚼や相互検討、比較対照といった精査のない結論が生じる恐れがある。それゆえに「できたつもり」、「わかったつもり」の断定的な情報検索行動に陥ってしまうのではないかという懸念もある。メディアを主体的に読み解く能力が求められる今日において、インターネットというメディアはテレビや新聞とは異なり、使いこなすという能力も必要となるため、利用者側の現状や問題点を的確に捉えることは重要なテーマである。

本研究は、2006 年度に行ったユーザーの情報検索行動の実態調査から得られたデータをメディア・リテラシーの視座から検証し、市民が情報社会を生きるための主体的な力の育成について考察する。

## 2. 研究方法

本研究は、筆者が 2006 年度に行った「実態調査」<sup>1</sup>より抽出した①統制的観察データ、②機械的記録データ、③面接調査データを用い、メディア・リテラシーという視座から量的・質的分析を行った。その際、知識・技能・態度の 3 つに重点を置き「大学生は、習得した知識と技能と態度から、多様な情報源を利用する」という仮説を提起し検証する。

## 3. 結果

面接では、インターネットメディアを利用するにあたり Web 情報の引用・採用について基本的な知識を習得している様子が見えた。また技能については、インターネット歴は 3 年から 11 年、インターネット利用時間は 1 日平均 1 時間から 5 時間、キーボード入力に関しても、「キーボードを見ないで打てる」、「キーボードを見ながらある程度早く打てる」と答えた者は全体の 9 割以上を占めた。調査者の課題説明時においては、検索エンジンの使用方法、閲覧 web サイトの

<sup>1</sup> 本調査研究は大学生を対象とし、可能ならば将来行う本研究の前駆をなす試論的な位置付けとして実施したものである。調査期間(予備調査を含む)は、2006 年 9 月 5 日から 2006 年 10 月 11 日までの 37 日間であり、対象者としては、大学生 28 名(男 9 名、女 19 名)、大学院生 7 名(男 3 名、女 4 名)の合計 35 名(予備調査 3 名、本調査 32 名)を選定した。大学生、大学院生(以下、大学生)は、課題操作用パソコンに移動した後、操作方法について調査者から説明を受けた。課題操作用パソコンには Yahoo、Google、msn、goo、excite、freshEYE の 6 つの検索エンジンが表示されていた。

①の統制的観察データは、課題(人名 2 件「長谷川如是閑」、「スチュワート・ホール」、用語 2 件「境界性人格障害」、「部分的核実験禁止条約」)について大学生に検索エンジンを用いて、採用しても良いと思われる情報をワードパッド上にコピー&ペーストさせた。その間、調査者は隣室より課題操作用パソコン上にセットされた小型カメラを用いて観察を行った。

②の機械的記録データは、録画機を使用し、閲覧 Web サイト・所要時間・検索時使用キーワードに加え、大学生が操作する実際の Web 表示画面と大学生の様子まで記録した。

③の面接調査データは、課題終了後に行った面接で知識テスト並びにインターネット歴・インターネット一日平均利用時間・キーボード入力レベルについて確認し記録した。

採用方法（コピー&ペースト）に関する質問も無く大学生は課題に取り組み、ハードウェアとソフトウェアの操作において困難に陥っている様子はいかたがえなかった。以上のことから、大学生にはインターネット情報検索における知識・技能の習熟度には一定の評価ができる。では、態度についてはどうか。Web情報の引用・採用時の注意点が知識として理解されているにもかかわらず、閲覧Webサイトのランキング結果と採用Webサイトの結果は、4課題ともウィキペディアの採用率が90%以上となった。「長谷川如是閑」の課題については、32名中24名（75%）がウィキペディアだけで結論を導き出しているという結果に加え、課題終了後の知識テストにおける認知度100%の結果を鑑みれば、大学生にとってウィキペディアの日常化が推測される。また、表示されたWebの1ページ目に載っているWebサイトへのアクセスは81.4%と集中し、選択から採用に至るWebサイト数の結果においても採用する情報は1採用から2採用で88%以上を占め、課題の結論を導くなど、「習得した知識と技能と態度から、多様な情報源を利用する」という仮説とは異なる結果となった。

#### 4. 結論

大学生は、情報技術を活用する知識、技能は習得されているにもかかわらず、態度の問題により多様な情報源を活用できていない現状が明らかとなった。それは、ウィキペディアの権威化をも推進しているように受け取れる。また、インターネットメディアの特徴を知識として習得しているような回答からは、大学生は一見メディアを主体的に読み解いているようにも見受けられるが、観察時の行動や最終的に選ばれた情報から分析するならば、インターネットの情報を社会的文脈でクリティカルに分析し、評価していないようにも受け取れる。これらを明らかにするためには、インタビュー等による質的分析を重視し再度検証する必要がある。

情報技術の急速な発達と普及により、我々市民の情報環境は「豊か」になると考えられる一方で、同一の情報源に収束され、取得する情報が制約される危惧も生じ始めている。そのような状態でも、相変わらず世の中の主たる関心はユビキタスネットに代表される技術的側面に偏っているように感じられる。技術発展が我々にとって不利益をもたらすことが無いように、人間的側面に留意する研究は極めて重要である。常に判断をメディアに委ね、情報に疑問を持つことも無く正否を見出す人々の現状を深刻に捉えたい。市民が情報社会を生きるための主体的な力を養うための態度の育成並びに実践が、今まさに必要となるのである。